

草分移民は原生林の混沌の調和を学び、小欲知多の生活を実践するのだった。

開拓農家の台所は、郷里と同じく土間であり、味噌、納豆、漬物、タクワン、アンパン等は移住地婦人部の結束で、今なお伝承されている。

ところで初期アマゾン日本移民は、ナーボ (nabo ポルトガル語の大根 *Raphanus saltivus*) と呼ばれていた。苦境に挫けずに、異郷の街に大根を売り歩く日本人の陽焼けした笑顔が彷彿とさせられる。

開拓者と共に歩み続ける、その大根の品種は「時なし大根」である。

博物学の先駆者

1908年6月18日に始まるブラジル移民は、地力の高いサンパウロ州を中心に発展し、後の日本企業進出の信頼の礎の役割を果たした。

企業再建の神様・土光敏夫社長 ^{どこうとしお} 率いる石川島播磨重工業 (株) のリオ・デ・ジャネイロ Rio de Janeiro への造船所建設も、トヨタ自動車のサン・パウロ São Paulo への工場進出も、報徳の教えの実践を色濃くし、単なる企業利益追求の次元を超えている。

最新の生産技術も現地に惜しみなく推譲し、経営財務の現地化を推進させ、優れた適地技術者を輩出させることにより、温もりある企業風土の醸成を成功した石川島播磨重工の進出によりブラジルの海洋産業は目覚ましく発展する。その誇り高き技術者の系譜は、富士の裾野のような拡がりを持つ。

トヨタのカイゼン運動の発展も、人づくりから環境創造の域に入りつつある。

掛川出身の橋本梧郎 ^{はしもとごろう} の、博物研究の継続はトヨタ財団の支援に負うところ大であった。

1934年 掛川中学校卒業の橋本梧郎は報徳思想の継承者として、実学としての植物分類学 ^{まきのとみたるう} を牧野富太郎博士から伝授されていた。

欧米列強が植民地経営のために博物学に国運を賭ける時代に、橋本梧郎青年は志高く移民船に乗り込んでしまう。大学に入る暇は無いと、蛮勇ではあるが、未開の地の植物探査は「若い力」の為せる技に違いない。

梧郎先生は、現地大学や研究機関に文献、標本が存在しない時代に、ひたすら山野を踏査し、慎ましい生活の中で、報徳に生き、植物研究に生涯を捧げる。学会はじめ皇室からの信頼は極めて高いものの、自慢することは一度も無い。

1950年に創設されたサンパウロ博物研究会は、牧野富太郎直伝のユーモアにあふれる講演会が好評となり、多くの弟子を育てている。

今は日系人の親睦組織を離れ、ブラジル人社会に広まる俳句 (HAIKAI) の季語の確立にも大貢献し、今日の隆盛を呼ぶに至る。

2008年8月26日に95歳の天寿を迎えるまで、原稿の執筆活動に勤しまれた。

辞世の句は「終点は大学の門 鳳凰樹 *Delonix regia* 垂南」垂南とは、梧郎先生 ^{スイナン} の雅号で、ブラジル原産の梯梧 ^{デイゴ} である。

先住民・グアラニー族の言葉で、花の形状がオウムの嘴の意味を持つ。

Suinã - *Erythrina speciosa* Andrews. 鳳凰の如く、実学探求は、常若そのものの、ブラジルに報徳の花を咲かせる。